じょうほう通

第18回北京エッセン 溶接・切割展覧会参加報告*

高内英亮**

Report from The 18th BEIJING ESSEN WELDING & CUTTING FAIR*

by TAKAUCHI Hideaki**

キーワード 中国, 展覧会, 上海, 溶接電源, 溶接ロボット, 溶接材料, 切断

1. 北京エッセン溶接・切割展覧会

2013年6月18日(火)～21日(金)の4日間に渡り、上海にて溶接材料、溶接ロボット、溶接電源・装置、切断機械等の展覧会“北京エッセン溶接・切割展覧会 (BEIJING ESSEN WELDING & CUTTING FAIR, 以降、北京エッセンと略す)”が開催された。開催日の数日前までは、気温20℃程度の過ごし易い気候であったが、開催日に合わせるかのように期間中は連日30℃を越す真夏日となり、北京エッセンに向けた企業の意気込みを表すかのような熱気に包まれた展覧会となった。

北京エッセンは1987年の第1回開催から26年目、総計で18回目を迎えた。2002年以降、毎年開催となり、開催場所は北京市と上海市とで交互に開催している。中国が、世界からも注目されるマーケットであるため、2010年以降の出展企業数は毎年900を超えており、アジア地域最大の溶接展覧会といわれるまでになった。世界的に見ても、一部では溶接世界四大ショー（または、溶接世界二大ショー）と呼ばれるほど大規模の展覧会になってきている。

北京エッセンの会場となった上海新国際博覧中心（写真1, 2）は、2年前の上海開催時の会場と同じで、上海市の代名詞とも言える観光地「外灘」（写真3）の直近に位置する。更に、最寄り駅の龍陽路駅には、浦東国際空港からの約30km間を約8分、最高時速430kmで運行するリニアモーターカーも走っており、上海の見所を味わいながら、北京エッセンも楽しめる立地となっていた。

会場内は、N1～N5とE5～E7の小ホールに分かれ、総計96,200㎡、東京ドーム二つ分の面積に匹敵する。北京市での開催時より若干狭くなっているものの、他の溶接ショーと比較すれば広大な面積である（図1）。

写真1 会場外観（上海新国際博覧中心）

写真2 会場入り口

写真3 外灘（The BUND）

*原稿受付 平成25年7月5日

**正員 上海神鋼溶接器材有限公司 Member, KOBE WELDING OF SHANGHAI Co., LTD

図1 会場マップ

図2 出展品目別統計（自社調べ）

写真4 国別エリア

出展は939社と2012年並の数字ではあったが、30以上の国と地域の企業が出展し、入場者やメディア取材も80以上の国と地域から参加するなど国際色豊かな展覧会となった。展示会場の中の一隅に、韓国エリアやドイツエリアなどに国別に区分けされている場所があったことが印象深い（写真4）。

今回の北京エッセンの入場者数統計は7月5日現在で未だ発表されていないが、会場内の賑やかな様子を見れば例年通り20,000人以上の入場者数であったことは間違いない。

2. 出展内容

商品分野は、溶接・切削展覧会という名が示す通り、溶接関連部品（送給機、トーチなど）を扱うブースが最も多く、次いで溶接材料、溶接電源、切断・加工設備を展示するブースが多く見られた（図2）。

溶接材料の傾向としては、ソリッドワイヤやフラックス入りワイヤをメインに展示したブースが多く、高効率化を求める声が強まっていることが如実に表れていた。展示は

エネルギーや造船、海洋構造物、パイプライン、といった分野別の展示が多く、特に造船関連の溶接材料が目についた。造船関連の溶接材料は中国国内のメーカーが数多く展示しており、競争の激しさが見て取れた。一方で、エネルギー関連の特殊材料は、国内メーカーでの展示は少なく、海外メーカー主体といった印象を受けた。

溶接電源に関しては、フルデジタル制御、波形制御、ロボットとの組合せ、溶接材料との組合せなどが紹介されていた。制御の容易さ、応用の利き易さ、をアピールする展示が多く、広く市場で受容られるものを強調していた。

全体としては、パネルや製品の展示がメインで、実演は少なく、商談用の場所を広くしているブースが多かった。新規技術の紹介の場というよりは顧客との付き合いの場という印象が強い展覧会であった。人脈を大事にする国などだけに、顧客を歓迎する姿勢を重視する傾向になったものと推測される。

3. 日本企業の出展

日本からは（株）神戸製鋼所（溶接材料、ロボット）、（株）ダイヘン（溶接電源、ロボット）、パナソニック（株）（溶接電源、ロボット）、小池酸素工業（株）（切断）、新日鐵住金溶接工業（株）（溶接材料、プラズマ溶接機）、ファナック（株）（ロボット）、大同特殊鋼（株）（溶接材料）などの多くのメーカーが出展していた（写真5）。

出展場所もメイン通路に面して、ブース面積も広いメーカーが多く、溶接やロボットの実演も多く行われていたことで、観客を集めていた。世界中の展覧会に出展した経験からか、展示や実演の内容は充実しており、中国の溶接・切断の市場で存在感をアピールできたように思われる。

4. 海外企業の出展

Lincoln Electric がメインの通りに広大なブースを構え、赤色のブースと、赤黒のユニフォームを身にまとったスタ

写真5 日本企業の出展ブース

写真6 海外企業の出展ブース

ッフが印象的であった。通路沿いには溶接材料と溶接電源を展示し、総合メカを強調していた。ブース内では造船やエネルギー関連など、多分野に渡る実演を実施しており、内容も充実していた。また、中国国内のグループ溶接材料メーカーである錦泰ブランドをブース内に展示しており、中国における欧米流の事業拡大の様子を伺わせた。

一方で、Lincoln Electric と肩を並べる二大溶接企業の一つである ESAB の出展が無いことが、今回の展覧会一番の衝撃であった。欧州の溶接総合メカとしては Air Liquide が出展しており、ロボットや溶接材料に電源を組合せて実演するなど、Lincoln Electric に負けじと総合メカとしての存在感をアピールしていた。その他、Böhler Welding や Special Metals などの著名な特殊鋼用溶接材料メカ、溶接用ロボットでは ABB や KUKA、溶接電源では中国で急激に市場を広げている Fronius がブースを構えたが、商談メインのブースとなっていた。

欧米系以外では、HYUNDAI METAL や KISWEL といった韓国の主要溶接材料メカも出展していた。HYUNDAI

METAL では溶接電源の他、ステンレス鋼や Ni 基合金、造船向け溶接材料など幅広いメニュー揃えを紹介しており、中国市場への意気込みを感じる展示になっていた。展示品の紹介ではタブレット端末を並べて置くなど韓国の電器関連の強さも垣間見えた (写真6)。

海外企業の展示内容では、中国市場専用開発したものはあまり見られず、海外で発表済みの技術や製品の紹介がメインであった。これは、中国の溶接業界自体が海外技術を流用したものが多いことで、中国独自のトレンドがあまり無いためと考えられる。全体として目新しさを感じない内容となったのはそのためであろう。

5. 中国企業の出展

大西洋や金橋、京群など主要溶接材料メカの存在が際立ち、電源メカとしては澳太機械が大きなブースを構えて企業規模の大きさを主張していた。しかし、中国メカ

写真7 中国企業の出展ブース

の多くは製品を展示するのみで、少々寂しい印象を受けた(写真7)。

中国国内の中小企業については、小さなブースでカタログを配るだけ、というスタイルも多く見られた。中小企業だからなのか、来客が無ければブースでスタッフがご飯を食べていたり、スタッフが居なかったりと、肩肘を張らないスタイルが日本の展示会と最も異なる点であろう。

6. さいごに

若干成長率の低下は見られるものの、未だに経済成長を続ける中国で、製造技術の重要な要素である溶接分野は、今後も活況な市場が続くと予想される。今回の展覧会の盛

況振りを見れば、世界中が注目している市場であることは疑いようもない。それだけに、今回の北京エッセンで日本企業の存在感をアピールできたことは大きな価値があったのではないだろうか。来年は北京市での開催となり会場の広さも一回り大きくなると予想されるが、その中で日本企業の存在感が更に大きくなっていることを願うばかりである。

北京エッセンの内容とは関係なくなるが、北京市開催であれば、故宮や万里の長城など歴史的な建造物が多い。一方で上海市開催であれば近代的な雰囲気でショッピングや夜景を楽しむ、というように開催地によって楽しみ方は違ってくる。是非両市での北京エッセンに参加頂き、雰囲気の異なる中国を味わっていただきたい。